

サロン2002 公開シンポジウム報告書(2009年度版)

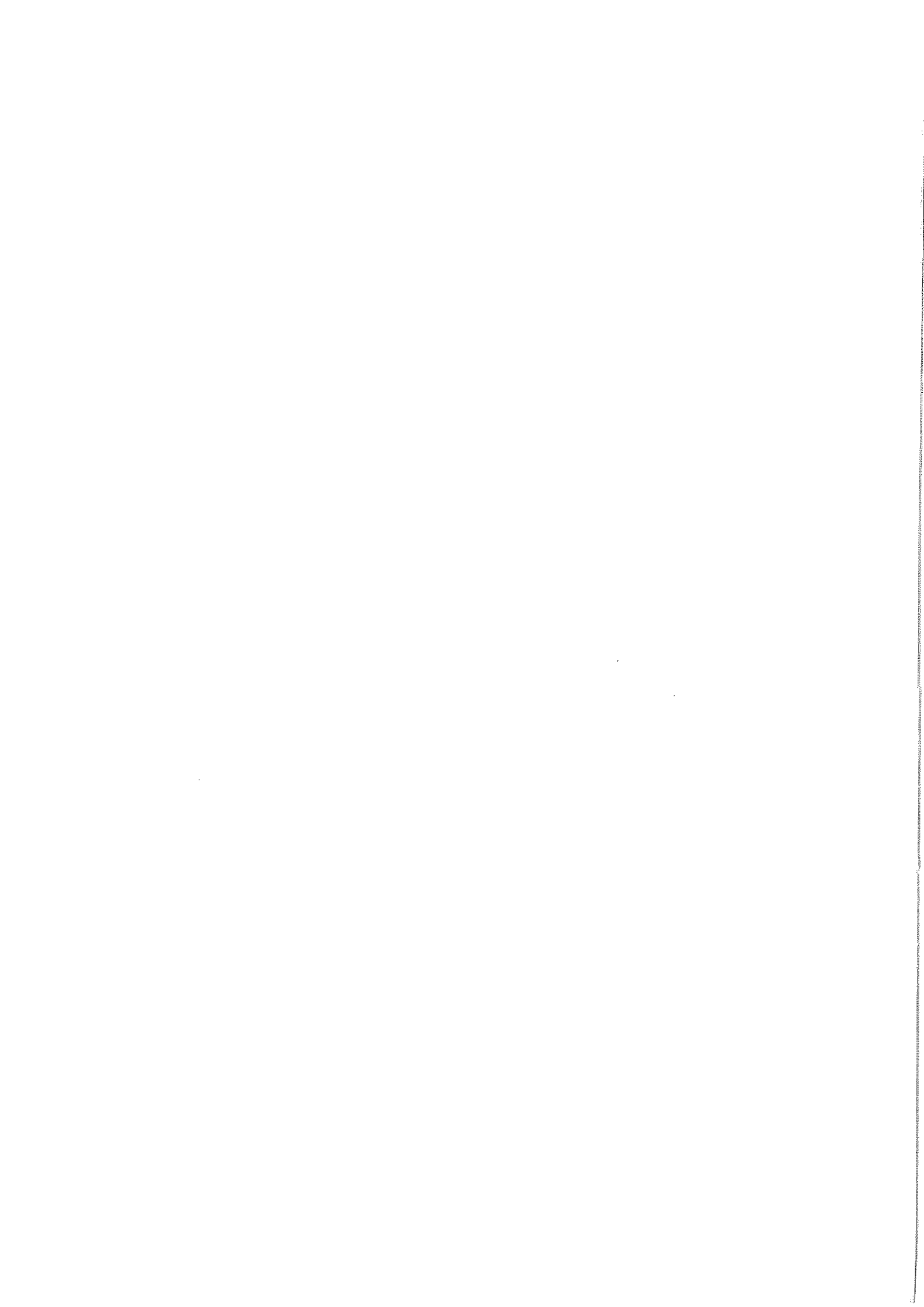
2019年ラグビーワールドカップ 日本大会を語ろう！



Road to 2019



SALON2002



I . シンポジウム

コーディネーター挨拶

中塚義実

第1部 プレゼンテーション

ラグビー・ワールドカップの楽しみ方 島田佳代子
ジャーナリストの立場から 直江 光信
日本ラグビー協会の立場から 岩淵 健輔

第2部 ディスカッション

参加者の感想(アンケートより)

2010年3月6日(土)
青学会館アイビーホール -アロン-

主 催
サロン2002

後 援
日本フットボール学会、ビバ！サッカー研究会、NPO法人横浜スポーツコミュニケーションズ

サロン2002公開シンポジウムのご案内

「2019年ラグビー・ワールドカップ日本大会を語ろう！」

サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン2002」は、2001年度より毎年度、公開シンポジウムを開催しております。

これまでのシンポジウムでは、「2002年FIFAワールドカップ」「地域スポーツの振興」「t o t o」を取り上げ、2005年度はデットマール・クラマーさんをお招きして「クラマーさんありがとう」を、2006年度は育成環境・ゲーム分析・観戦文化の観点から2006FIFAワールドカップ・ドイツ大会の回顧、2007年は「みるスポーツ」としてのサッカーをスタジアムでのライブ観戦を、そして昨年は「地域からみたJリーグ百年構想」をテーマに、地域で起きている熱いムーブメントを取り上げました。

そして今年度は日本ラグビーフットボール界の念願であり招致に成功したメガ・イベント、「2019年ラグビーワールドカップ日本大会」をテーマにラグビーワールドカップの素晴らしさや開催までの10年先を見据えた日本ラグビー界の動向と未来について語り合いたいと思います。このシンポジウムで多くの方と出会い、語り合えることを楽しみにしています。

記

主 催 : サロン2002

後 援 : 日本フットボール学会、
ピバ!サッカー研究会、
NPO法人横浜スポーツコミュニケーションズ

日 時 : 2010(平成22)年3月6日(土) 16:30~19:00(受付16:00~)
※シンポジウム終了後、20:00頃から懇親会を行います。

会 場 : 青学会館 アイビーホール ーアロンー
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷4丁目4番25号 / 電話03(3409)8181
※銀座線・半蔵門線・千代田線下車表参道駅下車(B1、B3出口より徒歩5分)

演 者 : 岩淵健輔(日本協会ハイパフォーマンス・マネージャー)
ワールドカップまでの10年、日本のラグビーをどうしていくのか。
日本協会ハイパフォーマンス・マネージャーの立場から

直江光信(スポーツライター)
ワールドカップまでの10年、日本のラグビーにどうなってほしいか
ワールドカップをどう楽しむかなど、ジャーナリストの対場から。

島田佳代子(ライター)
ラグビーとサッカーの両ワールドカップ観戦経験から観た違いと
ラグビーワールドカップの楽しみ方。
イングランドに8年暮らした経験から感じた、ラグビーファンとサッカーファンについて。

コーディネーター: 中塚義実 (サロン2002理事長/筑波大学附属高等学校)

参加申込 : ※どなたでも参加できます
・会員の方はサロン2002オフィシャルHPからお申込下さい。
・会員以外の方は 氏名、所属(差し支えなければ)、連絡先(TEL/e-Mail)
懇親会(参加・不参加)を明記の上、salon2002@j-sps.com までe-Mailにてお申し込み下さい。

参加費 : 1000円 (但し、学生・院生は無料)
お問い合わせ : サロン2002公開シンポジウム事務局
高田敏志 / e-Mail: salon2002@j-sps.com

「賛助金」のお願いについて：

本シンポジウムの報告書を、趣旨に賛同して下さる個人または団体からの「賛助金」で作成いたします。

「賛助金」は一口5,000円とし、拠出していただいた方のお名前を報告書に掲載させて頂くことで賛助の気持ちにお応えしたいと思います。

さらに、4口(2万円)以上の「賛助金」をいただいた個人や団体には、報告書への広告掲載も可能とさせていただきます。大きさの目安は以下の通りです。

A4版1ページ(表紙裏、裏表紙裏)…5万円以上

A4版1ページ(その他のページ) …5万円

A4版1/2ページ 3万円

A4版1/3ページ 2万円

「賛助金」をお出しただけの個人または団体は事務局へご連絡頂いた上で下記口座へお振込み下さい。
口座名：みずほ銀行板橋支店 普通 2076207 サロン2002プロジェクト代表 中塚義実

参考：サロン2002とは何か？

「サロン2002」は、以下の設立宣言に賛同する「同志」によるゆるやかなネットワーク組織です。

サロン2002設立宣言

(2000年4月1日)

我々は、以下に「サロン2002の“歴史”」、「サロン2002の“志”」及び「サロン2002の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン2002の設立を宣言する。

【サロン2002の“歴史”】

サロン2002は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社心グループ」(財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980年代後半からこの名称で活動)を前身とし、1997年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン2002」として活動を行ってきた。

【サロン2002の“志”】

サロン2002は、サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン2002の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン2002の“志”を実現する上で、2002年FIFAワールドカップ韓国/日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン2002の“会員”】

サロン2002は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン2002の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。

ただし会員は、サロン2002からの“Take”を求めるだけでなく、サロン2002に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン2002は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。

即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

2009年度の会員は現時点で約150名。全国各地にいる会員は、小・中・高・大の学校関係者、Jクラブ・地域クラブの関係者、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、サッカー以外の競技の関係者など多様です。国や地方自治体のスポーツ行政に携わる者や、JFA、各都道府県FA関係者もいます。様々な形でサッカー・スポーツにかかわりながら、“志”を実現させようと活動する者で構成されているのが「サロン2002」です。

「サロン2002」の主たる活動は、月例会の開催と、その内容を核とするホームページの運営です。

本シンポジウムは公開型月例会として毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しております。

サロン2002の詳細は、ホームページ <<http://www.salon2002.net>> でご確認ください。

コーディネーター挨拶

中塚義実（サロン 2002 理事長）

皆さん、こんにちは。サロン2002の理事長を務めています中塚と申します。今回のシンポジウムでは、コーディネーターとしてシンポジウムの中身の進行をさせていただきます。私自身は筑波大学附属高校の保健体育の教員で、サッカー部の顧問をやっています。しかし、保健体育の教員ですので、ラグビーの授業を担当することもありまして、つい先日までラグビーの授業を行っていました。

サロン2002とは何か

今回のテーマは、「2019年ラグビー・ワールドカップ日本大会を語ろう！」です。サロン2002はサッカー関係の人たちが中心となって作った組織であり、公開シンポジウムでラグビーのことを取り上げるのは初めてです。名称に2002がついているので既にお分かりかもしれませんが、2002年FIFAワールドカップは我々の組織にとって大きな出来事でした。いまから20年ほど前の1991年2月に、「2002年ワールドカップ日本開催に向けて」と題するシンポジウムをサッカー医科学研究会で実施したことが、今回の準備をしながら思い出されました（当日配布資料あり。本報告寄稿編参照）。サッカー医科学研究会は、今ではその姿を変え、今回ご後援いただいている日本フットボール学会になっています。

2002年FIFAワールドカップはサッカー界が総力を挙げて取り組まなければいけないことだということで企画したシンポジウムでした。演者として、当時の日本代表チーム監督だった横山謙三さんにも来ていただきました。日本サッカーリーグ総務主事であった川淵三郎さんには、メディア発表の少し前に開催されたこのシンポジウムでプロリーグの構想をお話いただきました。指導者の立場から大阪商業大学の上田亮三郎さんにもお話いただきました。

サッカー界は2002年に向けて、いろいろな組織や意識が大きく変わりました。同じように2019年のラグビーのワールドカップを1つのターゲットとして、ラグビーやスポーツ全体、我が国の文化全体に向けて何らかのメッセージを出せばということで、今回のシンポジウムを企画した次第です。

会場をざっと見渡しますと初めての方も大勢いらっしゃいます。今日はJリーグの開幕日ですので、サッカー関係者がそちらに行っている気もします。そこで、サロン2002とは何かということをごとお話しさせていただきます。お手元の資料に「サロン2002設立宣言」というところから細々と文字が並んでいるものがあると思います。日本サッカー協会に科学研 究委員会という組織があったのですが、そのサブグループとして社会学や心理学に興味を持つ人たちの調査グループがありました。それがサロン2002の前身です。1980年代終わり頃から定期的に集まって「社・心グループ」という勉強会兼飲み会をしていました。ところがそのころ、サッカー界に劇的な変化が起こります。Jリーグ開幕であり、2002年ワールドカップ招致活動であり、フットサルの誕生です。今までボールを蹴ったことがない人が気軽

にサッカーに関わるようになってきたのです。さらに、インターネットが猛烈な勢いで普及して、距離が離れていても簡単につながるようになった。でも、バーチャルな関係だけではつまらない。会って飲みましょうという人たちが社・心グループの仲間になり、メンバーが多様化したため1997年度から名称を改め、サロン2002という名で活動しています。2000年度からは会員制組織となり、現在全国に約150名の会員がおります。主な活動として月1回の月例会をいろいろなテーマでやっているのですが、その他にどこかに出かけて行う出張サロン、今回のような公開シンポジウムを行っています。月例会のテーマはサッカー関係の題材が多いですが、アートの話であったり、競馬が出てきたり、9月にはラグビーの話も出てきました。

公開シンポジウムは2001年度から会員以外の方にも広く告知して、幅広いネットワークを作っていこうという意図でやっています。2002年FIFAワールドカップに向けてということが1つ大きな柱でしたので、その前年に行われたコンフェデレーションズカップを総括しようというところから始まりました。2002年はワールドカップそのものを総括しました。ワールドカップ以降は、地域スポーツやtotoなど、さまざまなテーマで公開シンポジウムをやり、今回に至るということです。

ものすごく駆け足でサロンとは何か、公開シンポジウムがどのような位置づけでこれまで展開してきたのかをお話しさせていただきました。最初に総合司会の高田さんから話がありましたように、シンポジウムの内容は報告書の形でまとめています。それをできるだけ多くの方に見ていただいて、ここで出てきた話題を共有しようという意図です。

本日の進行について

まずそれぞれの演者の方から20～30分用意したお話しをしていただき、演者の話の後に質疑応答の時間も取って、ラグビーのワールドカップとはどのようなものなのか、2019年に向かってこれからの10年間どのように準備を進めていったらいいのだろうというところを掘り下げていきたいと思えます。最初に島田さんからイングランドで生活された経験を踏まえ、2つのフットボール、2つのワールドカップを両方体験された立場からラグビーのワールドカップがどのようなものかをご紹介します。その次に、ジャーナリストの立場からということで直江さんにラグビーのワールドカップの位置づけ、そして日本が今どのような所にいるのかという概観をしていただき、最後にラグビー協会の強化の責任者でもあります岩淵さんから、当事者として準備されていることについてのお話しをしていただこうと考えています。岩淵さんが非常に多忙で、明後日IRBの会議が海外であり、その準備がこの後急遽入ったということで、第一部のところで退席されます。予めご了解ください。第2部はフロア全体を交えてディスカッションができればと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

ラグビー・ワールドカップの楽しみ方

ライター 島田 佳代子

皆さん、はじめまして。島田佳代子と申します。私はもともとサッカーの方が好きでして、1999年から2007年までイギリスに暮らし、サッカーにどっぷりと浸かった生活をしていました。正直ラグビーのファンになったのは最近でして、今日もラグビーについてそこまで深い話ができないのですが、実際にラグビーのワールドカップを見に行った時の写真などありますので、そういったものを中心にご紹介していきたいと思っています。

◆ラグビーに興味を持ったきっかけ

実は私とラグビーの出会いは本日の演者である岩淵さんがイギリスにいらっしやった2001年です。仕事を通じて岩淵さんにお会いし、何度かサラセンズの試合を見に行ったこともありますが、当時は全く興味を持つことができませんでした。と言うのも、「ラグビー＝ルールが難しい」と思っていたので、純粋に楽しめばよかったのですが、見る前にとにかくルールを理解しようと思ってしまいました。



そのような感じでスタジアムに足を運んでいたのですが、隣のイギリス人に説明されてもチンプンカンプンで全く分かりませんでした。何人でやる競技かも、ポジションのことも全く分かりませんでした。そういった私でしたが、イギリスに住んでいる間に何度か日本に一時帰国をしていました。その間に何人かラグビー選手のお友達もできていて、日本でもラグビーを見に行きました。秩父宮のスタジアム自体は陸上のトラックもないですしイングランドに似ていてすごく素敵だと思いうれしかったのですが、観客数の少なさにびっくりしました。ずっと暮らしていたイングランドでは、私は興味を持っていなかったとは言え、国民的スポーツなので一般紙の一面を飾ることもありました。テレビを付ければスポーツニュースでラグビーの話題がやっているの、嫌でも選手の名前や誰と付き合っているかなどの情報が入ってくるんですね。そういう状況の中で暮らしていましたので、日本に帰って来た時にラグビーがマイナースポーツと言われていることがすごくショックでした。起源を迎えればサッカーと似たような兄弟スポーツですし、日本でも何とかラグビーが人気にならないかと思いました。そこで、ラグビーのことを勉強しようと思って本屋さんに行きました。その時に、書店にあったのがちょっと難しい本ばかりで、初心者の女性が手に取れるような本がなかったので、それだったら自分で書いてしまおうと思い、こういった本を書かせていただきました。この本を書く中で「100人に取

材を敢行」と書いていますが、大げさではなく本当にこのくらいの方々に、日本やイギリスで取材をさせていただきました。その過程でラグビーにすっかりはまってしまい、今では大のラグビーファンです。

◆ラグビーファンとサッカーファン

私が本を出したのが2007年でちょうどラグビーのワールドカップがフランスで行われた時でした。こういった本を出してラグビーを応援していきましょうと言っている私が見に行



かないのはおかしいと思って行ってきました。その時の写真がこれです。

サッカーとの1番の違いは、試合当日に選手がスタジアムの外にいることです。これがカルチャーショックでした。試合にはその日出ない選手ですが、メンバーに選ばれている人たちがスタジアムの外にいて、このようにファンサービスをしている。まずここが大きな違いだと思いました。

私自身サッカーファンなので、今ここにジュール・リメというサッカーのワールドカップを提唱した方の名前が付いた通りがあるのですが、この通りにあるサンドニスタジアムに行きたいと思っていました。しかし、絶対サンドニにはサッカーで行くと思っていたので、自分自身ラグビーの試合を見にこのサンドニに行くことにびっくりしました。

左下がサンドニの写真です。



右上は南アフリカ対イングランドの試合を見た時なのですが、もう本当にサッカーのワール



ドカップと変わらないです。こうやってフェイスペインティングされている方もいます。

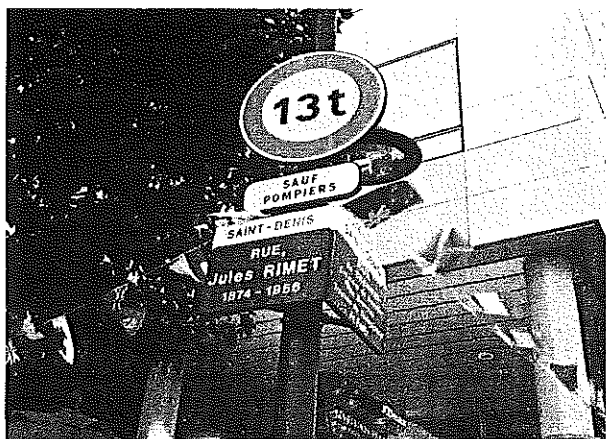
左下はウェールズでウェールズ対イングランドを見た時の写真ですね。今はこの写真に出ていないのですが、日本の方もいらっしゃいました。

右上はどちらのファンだか分かりますか？

これはフランスで撮った写真ですが、フランスの町をこのようにスカート履いたスコットランド人が闊歩していたんですね。ラグビーのワールドカップの時だったので、ラグビーのファンかと思ったら、こちらはサッカー欧州選手権のフランス対スコットランドの試合があったのでサッカーファンの人たちでした。



これは秩父宮で先日ありましたジュニア選手権の時に撮ったスコットランドの方です。こう見ると全然変わらないです。



私を感じた1番の違いは、上半身裸かどうかです。イングランドのサッカーファンってとにかく裸になりますね。他の国のサポーターと話をしている、私がイングランドのファンであることを伝えるとなぜイングランドのサポーターは上半身裸になるのかと聞かれるくらい、皆イングランドのサポーターは裸です。脱いでも胸にイングランドのマークが入っているののでどのファンかすぐに分かります。

これは私を感じた1番大きな違いです。

今でもラグビーは上流階級の人が好むスポーツで、サッカーは労働者階級が好むスポーツと言っている方がいらっしゃるのですが、私8年間イギリスに住んでいてそうでもないなと思いました。もちろん、労働者階級の方でラグビーだけを見る方はほとんどいないと思います。ただ、両方見る方は多いです。また、中流階級以上の方で両方好きな方も本当に多いです。この本を書く時に、ツイットナムにあるラグビーミュージアムの館長さんとお話をさせていただきました。もちろん根っからのラグビーファンです。その方からおもしろい話を伺ったんですが、その方自身はパブリックスクール出身のラグビーファンですが、サッカーのコルチェスターというチームのシーズンチケットを持っているそうです。これは決して珍しくないそうです。そんな彼が教えてくれたのは何年か前にラグビーの試合を見るためにフランスに行かれたそうです。その時に移動する飛行機の中に悪名高きサッカーのフーリガンがいたそうです。その人たちから聞こえてきた話が全く同じラグビーの試合を見に行くという話だったそうです。それで、このミュージアムの館長さんは悪名高きフーリガンがラグビーの試合に行ったらどうしようという心配をされたそうです。でも、結局トラブルは起こらず、たまたま帰りの飛行機も彼らと同じだったそうですが、彼らが言っていたことは、「これがサッカーの試合だったら暴れるけど今回はラグビーだからね」ということだったそうです。結局同じ人たちが見ているのですよね。

その他にもケンブリッジを出て弁護士をやっているようなインテリの方がラグビー好きと言いながら、サッカーのアーセナルのシーズンチケットも持っていました。そうやって見る人が重なっているのに、未だにサッカーは労働者階級だけでラグビーは中流階級以上と言われる



のもどうか?と思います。両方見る人が多いからスタジアムもうまるのではないかと思っています。日本ですと、ラグビーファンの方と話をしているとサッカーは嫌いだとされることが多くて、またサッカーファンの方と話をしているにもラグビーはあまり興味がないと言われてすごく残念でした。もちろんこれら以外にもスポーツはあるので、いろいろなスポーツの人気が出る文化が日本にも根付いてほしいなと思っています。

◆Jリーグがはじまってわずか7年

この本を書いた時に私はもともとサッカーファンで、サッカーファンの方に手にとって欲しかったので、サッカーと絡めたことをいろいろ書きました。その1つが清雲英純さんというサッカーのドーハの悲劇の時にコーチをされていた方のお話です。

この方は日川高校出身でして荒田豪選手のお父さん荒田健さんと組んで花園のベスト8まで出られた方です。清雲さんにお話しを伺った時にハッとしたんですが、日本のJリーグが始まってまだ7年。もちろん清雲さんが中学生、高校生だった頃サッカーは人気がなく、どういったスポーツかも分からなかった。でも、オリンピックを見ていたら「世界で最も競技人口の多いスポーツはサッカーです」というアナウンスがあって、それでサッカーというものに興味を持ち、サッカーを始められたそうです。1992年にオフトさんが就任されたのですが、その時日本のサッカーはまだ全く人気がない状態でした、ちょうど北京であったダイナシティカップの日本代表は最下位であろうと言われていたくらいのチームだったそうです。初戦の韓国戦、日本人メディアはたった2人の記者だけだったそうです。この後に、この大会で優勝し成田空港に戻ってきたら何百人というファンやメディアが駆けつけていたそうです。

この話を聞きまして、わずか10数年でここまで変わるんだなと思いました。だから今2019年のラグビー・ワールドカップが決まっています、正直国内ではラグビーの人気も低く心配な面もありますが、清雲さんから聞いたサッカーの話から考えますと、今日本のラグビー界では国際試合ではメディアも2人以上駆けつけていますしそこまでひどい訳ではないと思うので、良い方向に持っていけるのではないかと考えています。

◆ラグビーの起源

私がイギリスに住んでいた間に、ラグビーが好きになれなかった理由に、サッカーが好きすぎてラグビーがサッカーより人気になったら嫌というものもありました。今でもラグビーはサッカーの最中に、ある少年がボールを持って走り出したのが起源であると思っている方も多いと思います。しかし、実際19世紀にはいろいろなスポーツがあって今で言うサッカー、今で言うラグビーというものはなくボールがゴールに届けばいいという大まかなルールで行われていた時代がありましたのでサッカーがラグビーの起源であると言われるのは残念だと思います。この誤解を1人でも多くの人から解きたいなと思っていて、今ちょうど英国フットボールの本を書いています。英国フットボールの本なのですが、10ページ以上はラグビーに割いていて少しでも多くのサッカーファンにラグビーを知ってもらいたいと思っています。

これは、2007年にラグビーという町に行った時の写真なのですが、もう街中にはウェベリースカップという植木などがあって優勝トロフィーなどもありました。これは出場20カ国のフラッグが描かれたものです。もちろん日本の国旗もあります。これはラグビー校です。少し地味な感じでビックリしたのですが、博物館が銅像の近くにありまして見学することができます。

こういった形で写真を中心に紹介させていただきました。本当に私はラグビーファンになって日が浅いのですが、1人でも多くの方にラグビーが好きになっていただくためにこれからも

活動していきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

中塚 ありがとうございます。イングランドで8年間生活される中で感じられたサッカーとラグビーの様子をお話いただきました。サッカーは労働者階級、ラグビーは中流階級以上という認識は、いまではあてはまらなくなっていることについても紹介していただきました。質問なのですが、同じ人が両方のフットボールの観戦に行くということは、それぞれチケット代を払うということで、かなりお金がかかるのではないかと思うのですが、チケット代の設定に違いはあるのでしょうか。

島田 ラグビーの方が若干安いと思うのですが、国際試合では安い席で5000～6000円とサッカーとほとんど変わらないです。おもしろいと思ったのが、サッカーのワールドカップでは1990年のイタリア大会以降毎回優勝候補、ベスト4は確実に言われながらベスト4にすら進出できていません。一方、ラグビーは優勝、準優勝ときているので、サッカーのイングランド代表選手がイングランドNo.1のスポーツはラグビーになるのではないかと言っていたことがありました。

中塚 グローバル化が進む中で、いくつかのサッカークラブでは、先発メンバーにイングランド人がいない場合も見受けられるのですが、ラグビーではどうですか。

直江光信 外国人選手が多いですね。

田中俊也 大学でラグビーをやっていたような人たちは、卒業後は仕事をしながらラグビーをしているのですか。

直江 イングランドの場合、トップクラスの選手たちは高校卒業したらそのままクラブチームに入ります。もちろん、ケンブリッジなど大学のラグビーチームもあるのですが、主流としてはクラブチームです。

田中 同じクラブにラグビーチームとサッカーチームがある場合もありますか。

島田 イングランドではほとんどありません。もちろん同じ地域にラグビーチームもサッカーチームもありますが、ドイツのように同じ母体ではないです。

岩淵健輔 今の話ですと、フランスなどは同じクラブの中にラグビーのチームとサッカーのチームがあるというケースがありますが、イングランドでは基本的にないと思います。

トッププレイヤーは高校を卒業すれば、卒業する前から入っていたクラブチームでそのまま上に上がって行きます。

田中 プロのリーグでは年間何試合くらいありますか。

岩淵 イングランドのプレミアシップでは、カップ戦などを合わせると年間30試合は越えると思います。だいたいシーズンは9月第1週から5月最終週まで9カ月間くらいです。その間に代表チームの試合がありまして、イングランドではあまりにも試合が多すぎるということで選手会の中で年間の出場試合数を32までにするというところを取り決めましたが、実際には、この取り決めが守られていないケースもあります。ラグビーでは外国人枠というものがありまして、外国人枠が適用されないのはヨーロッパの選手と南アフリカ、フィジー、トンガ、サモアあたりの選手です。日本人は規定上外国人になります。

プレーヤーの階級差

高橋義雄 見る方はサッカーもラグビーも見るというのは、マーケティングを考えれば階級を越えて消費者を増やすということでそうなるのかと思うのですが、プレーをしている方の階級による差はあるのでしょうか。

島田 私自身がイングランドで関係者の方からお聞きしたのは、昔は良いところのお坊ちゃまです。パブリックスクールに行ってというラグビーをやるケースが多かったそうですが、今はクラブ化することで競技者数全体が増えているのでその傾向はなくなってきているようです。

岩淵 イングランドは2003年にワールドカップで優勝しましたので、そこをきっかけにワールドカップを目指す人が増え、もともとはパブリックスクールのスポーツであった関係で中流階級以上の選手が多かったですが、最近はずしもそうではない選手が増えてきています。ただし、イギリスとしてはまだパブリックスクール出身の選手が多いのも事実です。サッカーと同じようにアカデミーを立ち上げて、そこで小さい頃からやっている所も増えてきていますので、階層にこだわらなくなっています。

中塚 そもそも1995年までは、ラグビーユニオンは全部アマチュアですよ。

つまり1995年にプロフェッショナルリズムを導入して以降とそれ以前は全然違う世界と考えるのが正しいですね。

岩淵 全然違う世界になりつつあります。プロが1995年に出来て、2003年に優勝したあたりから現実的に変わり始めました。もともとラグビーの選手たちはそれぞれ仕事を持ちながら夜集まってやっている場合が多くて、イングランド代表選手でも医者や弁護士などたくさんいましたが、最近はかなり少なくなってきています。先ほど直江さんの話にありましたように大学に行っている選手もいますが、今はあまりいません。

中塚 ありがとうございます。島田さんが提起して下さった見るスポーツとしてのラグビーについては、後半戦でまた取り上げたいと思います。島田さんありがとうございました。

ジャーナリストの立場から

スポーツライター 直江光信

◆ラグビーワールドカップの歴史

スポーツライターの直江でございます。よろしくお願ひします。ラグビーのワールドカップの歴史を大まかに説明させていただきたいと思ひます。お手元の資料をご覧ください。

ラグビーのワールドカップって実はまだ6回しか行われていないんですね。1987年のニュージーランド・オーストラリア大会というのが第1回でした。当時は、アマチュアの大会で非常に牧歌的でした。

第2回までは映像を見ていただけると分かりますが、試合が終わった後に観客がピッチにまで降りてきて、試合が終わった選手と記念撮影をするくらい緩かった。日本代表は第1回から全部出ています。笑い話ですが、第1回ニュージーランド大会の時に日本代表が記念のTシャツを作ったそうです。スペルが正しくは Auckland ですが、Oakland というスペルでプリントしてしまっ、結局ホテルの中でしたかそのTシャツ着なかったという話があるくらい牧歌的でした。それでも、60万人の観客が入りました。今ですと、世界3大イベントと言われるくらいの規模の大会になっていますが、1991年くらいまではこのような雰囲気で行われていました。



1995年、今インビクタスという映画が上映されています南アフリカ大会あたりからだいぶ変わってきました、この大会が終わった後からプロに移行してきました。1999年大会はイギリスのウェールズを中心にヨーロッパで行われたんですが、この大会がラグビーの世界ではプロ化されて初めてのワールドカップと言われています。この年から110万人から170万人と爆発的に観客が増えるようになってきました。何が変わったかと言いますとそれまでのラグビーはヨーロッパが舞台で5ネーション（イングランド・スコットランド・ウェールズ・北アイルランド・フランス）と呼ばれていて、その対抗戦がラグビーの全てだったんです。そこだけで順位が決まれば良かった。そこに、オーストラリアや南アフリカが出てきて本当の世界1位を決めようと始まったのがワールドカップです。その時は、IRBというサッカーでいうFIFAのような統括機関もそこまで力を入れていませんでした。しかし、段々回を重ねるごとに非常に儲かるイベントであるということが分かったんですね。これは活かさない手はないと変わってきたのが1999年のワールドカップです。ここから、どんどんビジネスに入って行って、2003年オーストラリア大会で初優勝したイングランドは選手30名のスコッドに対してチームスタッフの方が多いというくらいお金の掛かるイベントになっていました。

2007年には124万人集まり本当に収益が出るイベントになっていました。

日本でラグビーがプロ化されたのは本当に新しく2000年だったと思います。それも企業チームの中で会社員としてプレーしながら、日本代表の期間だけ日本協会に出向という形でやっていました。そこで、プロ化が遅れてしまったために世界との差が開いてしまったという現状があります。日本代表のワールドカップの戦績ですが、これまで6回出場して勝ったのは1回、宿沢朗さんが監督をされた1991年イングランド大会の最終戦でジンバブエに勝ちました。もう1つは2007年のワールドカップでカナダ代表に最後引き分けました。この1勝1分けで、あとは全部負けています。2019年にラグビーのワールドカップが日本ですが、IRBが心配しているのは日本が大丈夫かということです。開催国が強くないと盛り上がり欠けるので、そこが1番心配されています。

◆日本ラグビーの現状

2019年に日本代表が最低ベスト8に入らなければいけないだろうというところからお話しさせていただきます。日本ラグビーの世界での現在地ですが、世界ランクが13位です。13位と聞くとサッカーと比べてずいぶん上だと思われるのですが、ラグビーは20位くらいまででほとんどカバーできるくらいのレベルです。さらに、10位以下と10位以上でだいぶ差もあります。ですから非常に微妙な位置です。でも、ラグビー競技人口では、イングランド・南アフリカ・フランス・ニュージーランドに次いで世界で5番目に多いです。

また、グラフを見ていただくと分かるようにチーム数は世界で1番多いです。日本では、学校に1チームありますが海外だと同じクラブの中に1軍、2軍、3軍と何軍かあります。これは結構大切な構造の違いです。日本は、高校あるいは中学で合同チームもありますが基本的に大会に出る時には1校1チームです。海外では、1軍、2軍、3軍とあってそれぞれのレベルにそれぞれの試合がありますので試合数が非常に多い。日本の高校ラグビーでは今1000チームくらいありますが、日本の高校ラグビーカレンダーでいくと、1月の新人戦で新チームが始動して、それに勝てばブロック大会や春の選抜大会があって6月くらいにまた県内で総合体育大会という大会があります。そして、9～11月に花園の全国大会予選があります。県単位で考えると新人戦・総合体育大会・花園予選の年間3大会あります。全部で1000チームありますが、3大会全部1回戦で負けたら年間3試合しかできません。なぜかと言うと、全ての大会がトーナメント制で行われているからです。これは構造上の大きな問題です。逆に勝っていくとどんどん試合数が増えていく。ここで一気に差が出ます。よく試合のための練習をしようと言いますが、年間3試合しかなかったらそんなこと出来る訳ないですね。そこを変えなければならない。

ニュージーランドの場合、日本と冬と夏が逆なので3月から始まって8月まで基本的にリーグ戦です。どのカテゴリーにもリーグ戦があって、それを全部地域協会が運営するのですが、半年間で20～25試合ほど行います。ニュージーランドでは半年で20～25試合なのに対して日本では年間3試合。これだけ違いがある。同じ練習をやっている、その技術を試合で使えるかが大事なのに日本だとどうしようもない。日本だとほぼ毎日練習しますよね。ニュージーランドやオーストラリアだと週2回練習なんです。火曜日・木曜日に練習やって土曜日に

試合。それでもどんどんうまくなる。なぜかと言ったら毎週試合があるから。試合をやって次の週の練習で課題を修正する。そしてまた次の週末の試合で練習したことを試すというサイクルをどんどん積んでいけるので、練習量が少なくてもどんどんうまくなる。ここの構造を直さなければ日本のラグビーは強くないというのが持論としてあります。

これは大学ラグビーでも似たようなことが起こっていて、例えば早稲田大学では140人くらい部員がいます。そのうち試合に出場できるのはリザーブまで合わせて22名です。22名が年間何試合あるかと言ったら大学選手権決勝まで行っても11試合しかできない。大学ラグビーは先ほどお話しがあったように日本の独特なシステムです。4年生までいるのでほとんど上級生が試合の中心になって、下級生は試合を戦う機会がない。海外では、どんどん上のカテゴリーに行ってスキルアップするチャンスがある。日本では、試合数が限られている大所帯の中に入れられてほとんどの子は3～4年生になるまで出番がないという構造上の問題がある。ここを変えなければ日本のラグビーの未来は暗いと思っていて、後ほど岩淵さんにはどうしたら日本のラグビーが明るくなるかというお話しをしていただきたいと思っています。

◆ 2019年に向けて

2019年まであと10年くらいですが、それまでに日本のラグビーは間に合うかですが、間に合わないとそこで諦めては終りなので頑張っていくしかありません。去年の6月に20歳以下の世界大会が日本で行われました。これはIRBが主催する大会の中では、ワールドカップの次くらいの規模の大会だったのですが、日本は予選リーグ全敗で15～16位決定戦にまわり1試合勝っただけでした。しかし、内容としてはスコットランドやサモアにも良い試合ができました。スコットランド戦が12-7、サモア戦が29-20でしたが、あと1歩のところでした。本来なら大学が選手を出したがるのですが今回は珍しく準備を長い期間かけて行いました。前年の12月から合宿や海外遠征を行って、6月に日本の蒸し暑さも味方にしてやればそれくらいは戦える。あともうちょっとやれば勝てるところまで行けました。

2019年のワールドカップをどう位置付けるかということになった場合に、もちろんそこで全てがうまくいって、それで終わりでもいいのかと言ったらそんなことはなくて、その後に日本のラグビーがどうなるかの方がはるかに重要です。2019年に競技人口を伸ばし、日本のラグビーが継続的に強くなっていく。世界の中で存在感を示せるような形にしていかなければいけない。これまでお話ししたような課題をクリアしていけばもっと良くなるだろうと個人的には思っています。

あと2019年で心配されていることはお金の問題ですね。ワールドカップを開催するのに150億円くらいのトーナメントフィーがかかると言われています。ただ、ヨーロッパで行われているようなものと同じような形でワールドカップをやっても成功しないと思います。日本でしか開催できないワールドカップをやらなければいけない。そのためにどうするかを考えていかなければいけない。お金を集めるのは大切ですが、個人的に思うのはお金のかからないワールドカップにすればいいじゃないかということですね。東京オリンピック招致で言っていた

ように商業主義のワールドカップではなくて、お金を抑えることで成功させるワールドカップにしたい。日本だと国土が小さいのでそういうことがやりやすいと思います。

これら構造上の問題やどのようなワールドカップにしていくかを考えていけば2019年のワールドカップは成功するのではないかと考えています。岩渕さんからすれば、「簡単に言うなよ」と言われるようなこともあるかもしれませんが、この辺で話を終わらせて頂きます。

中塚 ありがとうございます。ラグビーのワールドカップの歩みから日本の状況。特に日本の状況のところでは、サッカーの人たちもどこかで聞いた話だなと感じる人もいますかと思えます。何か今のお話しについて確認しておきたいことはありますか。

◆ワールドカップ開催費用について

牛木素吉郎 費用について確認したいのですが、150億円かかるというお話しがありました。新聞ではデポジットを支払う必要があるような話が出ていました。このデポジットというのはいくらですか。それはIRBが取っちゃうわけですか。

直江 「開催させてください」という上納金のようなものですね。ただ、日本で開催するから日本が全て払っておしまいという訳ではなくて、4年に1度集まったお金でIRB自体を運営していきますし、IRBが主催する大会の費用などにも当てていますので、日本にもそれで得るものはあります。

牛木 それは、IRBが使うので世界のラグビーのために使うということになると思いますが、日本はお金がないのにそれを支払って、テレビの放映権もIRBが取る。日本に残るのは入場料収入だけということなのではないでしょうか。

直江 基本的に入場料収入だけです。ですから観客を集めなければいけません。テレビの放映権やスポンサーについては、日本にお金が入らないようになっています。

鈴木崇正 協会の内外でスタジアムに観客を入れるための動きがありましたら教えてください。スタジアムのリストを見ますと、サッカーファンには馴染みがあるけれども、人を集めにくいスタジアムもあると思いますし、日本の試合やイングランド、フランスの試合はあまり心配いらないかと思うのですが、例えば九州でやるウェールズ対サモアの試合で4万人スタジアムをいっぱいにするためにはいろいろな知恵が必要だと思うんです。それが、IRBへの上納金をいかに回収していくかという重要なファクターになると思いますので、どういふ動きがあるかを教えてください。

直江 協会の内情は分からないのですが、協会が言うには入場券の値段を多少は変化させると

いうことです。2003年のオーストラリア大会に僕が行った時には、あまりメジャーではない試合だと1番安い席で500円から入れました。対照的に決勝戦などの入場料はものすごく高い。そういうことも考えていかなければいけない。それでも苦しいのは確かだと思います。どちらにせよ入場料収入しか収入源がないことは分かっているのです、あとは観客をいかに集めるかといかにコストを下げるかしかないと考えます。それこそ今後10年で考えていかなければいけないと思いますし、先ほど島田さんがおっしゃったようなサッカーファンを取り込んでいく動きも必要だと思います。逆にいいアイデアがあったら皆さんから教えていただきたいと思っています。

中塚 そのあたり後半のディスカッションで掘り下げられればと思います。私から関連で1点質問させていただきたいのですが、地図の枠内に香港スタジアムやシンガポール・スポーツ・ハブというのが書かれています。フランス大会でもウェールズのカーディフでやりましたよね。他の大会でもその国とは別の会場でやることあるかと思うのですが、上納金150億円のいくらかを香港協会やシンガポール協会に支払ってもらうということなのでしょうか。どのような理由で他の国の会場を活用することになっているのでしょうか。

直江 そこまで日本協会がアプローチをかけたのか分からないのですが、たぶんIRBに出した時に1度日本だけでやってくれという話になりました。ただ最近また海外のスタジアムでも一部試合をやろうという話が出ています。ラグビーのワールドカップが日本に決まった背景にはラグビーのグローバル化ということがあり、日本だけでなくアジア全体にラグビーを浸透させようという意図があるので、このような形になっているのだと思います。

中塚 どうもありがとうございました。直江さんのお話しにもありましたが、2019年の日本代表の活躍に向けてこの10年間どのように展開していくかが重要であるという気がしています。次は、日本代表ハイパフォーマンス・マネージャーという、サッカーの人には聞きなれない役職で、強化プログラムづくりの全権を担っておられる岩渕さんの出番です。よろしくをお願いします。

日本ラグビー協会の立場から

日本ラグビー協会ハイパフォーマンスマネージャー
岩淵健輔

◆ハイパフォーマンスマネージャーの役割

こんにちは。岩淵と申します。ハイパフォーマンスマネージャーということで今紹介いただきましたが、ラグビーの世界ではこの名称は各国で使われています。ハイパフォーマンスというのはなかなか日本語に訳しにくいと思いますが、競技力向上という訳し方をしています。競技力向上というのは、日本の国際競技力を上げるということで、そういう意味で私は来年から日本A代表というものを作ろうとしているのですが、代表チームとしては20歳以下の代表



チーム、高校生の代表チーム、高校2年生までの代表チームがあります。女子の代表チームもあります。各カテゴリーにももちろん監督も別々にいまして、そこの連携を担当しています。

これからお話しさせていただくことは、2019年のラグビー大会に向けて強化としてどのように取り組むかということです。ワールドカップに向けての目標やその目標に向けてどのように行動していかなければいけないかということをお話しさせていただきます。おそらくここにはサッカーの関係者の方が多いですが、こういうプログラムを作る時には、サッカー協会の方にもお話しを伺い、他の国で長期的な育成がうまくっている国、日本と似た環境の国にも聞いて、今の日本の現状にどれが合っていて、かつどれが2019年に間に合うのかということ念頭に作っています。私の1番の仕事は、2019年のワールドカップでこれからお話しさせていただく目標を達成することですが、今からお話しさせていただくことはサッカーのワールドカップでもそうだったと思うのですが、ワールドカップだけでなくその後の日本のラグビーに1番いいものということで考えています。これまで日本のラグビーはこういう形でやってきたことがないので、毎年見直し、うまくいっていることは伸ばし、うまくいっていないところは修正を加えながら2019年やそれ以降に繋げていきたいと思っています。

◆2019年ラグビーワールドカップ日本大会の意義・目標

最初に日本でラグビーのワールドカップを行う意義と目標についてお話しさせていただきます。ここまでにラグビーはパブリックスクールのスポーツであるという話がありましたが、ラグビーは非常に保守的なスポーツです。今でもその名残は残っています。ホームユニオンと呼ばれるラグビーの伝統国のラグビー協会が、世界のラグビーのほとんどを牛耳っているよう

な状態です。その国以外でワールドカップが開かれたことは今まで1度もありません。

今回の日本のワールドカップがはじめてになります。今ラグビー界では6ネーションズと呼ばれるイングランド・スコットランド・ウェールズ・アイルランド・フランス・イタリアの6カ国対抗と南半球のトライネーションズと呼ばれる南アフリカ・オーストラリア・ニュージーランド、そして最近非常に力を伸ばしているのがアルゼンチン。このあたりが、今世界ではティア1と呼ばれています。ティア1というのは上位国ということで、日本はティア2というところにいます。ティア1の国がほとんど世界のラグビーを動かして、ティア1同士で試合をしあっているという状況です。そういう意味でも日本でラグビーのワールドカップが開かれるということは、ラグビーにとっては非常に大きな変化になります。

目標としては、とにかく決勝トーナメントに入ることがあります。今日本のラグビーの世界ランキングは13位です。ラグビーではランキングがその国の位置を示しています。そして、10位以上と以下では非常に大きな差があります。30点から50点くらいの差はあると思います。2011年にワールドカップがあるんですが、日本はこれから4~5月に行われるアジア予選を兼ねた大会で出場権を獲得すると、ニュージーランド、フランス、カナダ、トンガと一緒にプールになります。ベスト8に上がるためには3勝が必要になりますので、トンガとカナダに勝って、さらにニュージーランドかフランスに勝たなければいけないというのが現実です。フランスとは2003年のワールドカップで戦って29-51でした。ニュージーランドとは1995年ワールドカップで145点取られています。そういう意味で、ワールドカップでベスト8に入ることは非常に難しい目標ではあります。

今現在どのような状況であるかということをお話しさせていただきます。2011年まではこのような形でやってきました。2007年からニュージーランド人のカーワンという同じヘッドコーチできています。2007年のワールドカップでは、1分け。カナダと引き分けが精一杯でした。今までワールドカップ6回行われて1勝しかしていないということで、2011年のワールドカップでは、まず2勝を上げることを目標にしています。

次のスライドを見ていただくと、2007年のワールドカップではフィジーという上位国に4点差。カナダ戦では引き分け。この時点で世界ランキングは18位でした。2008年に入って、アメリカ戦で2連勝してランキングは16位まで上がりました。そして、2009年に入ってトンガ、カナダに勝って現在ランキングでは13位。2007年から少しずつ順位を上げて2009年のトンガ戦、カナダ戦で勝っているということは、次のプールであたる相手です。まず2勝というのが最低の条件として我々は考えています。

◆2019年にベスト8を達成するために

そして、2019年でベスト8を成し遂げるために達成しなければいけないいくつかの項目があって、まず2011年のワールドカップで2勝。2015年で同じように2勝。2019年にはなんとかベスト8に入るというのが数値目標になっています。その中で、いくつか考えていることがあります。先ほどイングランドのプロの選手は大学に行かずにそのままクラブに

入るという話がありましたが、日本の場合は高校・大学・社会人という形になっています。逆に海外から見た場合、高校生・大学生でそれだけのチームがあつて年間を通じて活動しているというのは稀であるし、考え方によってはそういうリソースを有効に活用できるのではないかという考え方があります。そして、日本独自の強化の方法を考えなければいけないということで、次のページを見てください。

これは、2019年に向けたターゲットです。どの年代でどの相手をターゲットにするかということが書いてあります。まず2019年の日本代表選手の平均年齢が25歳と設定しています。これは過去5年間の日本代表選手の平均年齢が25～26歳ということで設定しています。そして、ベスト8を達成するために、2019年に25歳の選手というのは2009年で15歳。中学3年生になります。その選手たちが2011年には、ここにはU-20と書いてありますが、正確にはU-18。つまり2019年に中心となる選手たちは、2011年には高校生の代表チームに入っています。その時に目標とするのは、トンガ・サモア・フィジー・イタリア。これは今日本の少し上位にいるチームです。フィジーが9位、サモアが12位、イタリアが11位。トンガより今日本の方が上なんです、力としては少し上のレベルになっています。この選手たちをそれぞれの国に遠征させて、その国とまず戦う。そして、今から4年後の20歳以下の大会で、ラグビーの世界ではワールドカップ以外世界大会はこのU-20の大会だけなので、ここの大会でベスト8に入るとというのが2019年のベスト8に繋がる1番のターゲットにしなればいけないところと考えています。

今このような話をさせていただく時に10年とお話しさせていただいていますが、私の中では3年後の高校生の代表チームがイタリアやスコットランドに勝てるかどうかというのが非常に大きなポイントとして考えています。先ほどからお伝えしているようにヨーロッパでは18歳を過ぎると既にトップチームと一緒に練習しますので、非常にそこからの開きが大きくなっています。高校生の年代のところでワールドカップで破らなければいけないような国を破れないのであれば日本の2019年のワールドカップも非常に厳しいのではないかと危機感をいただいています。

ベスト8に入るために最低やらなければいけない条件ということで、これ以外にもいくつもあります。1番最初に日本スタイルの確立ということで、おそらくサッカーでも日本がどうやったら世界に勝てるのかという議論がされているかと思います。ラグビーの世界でも全く同じで、どのような形で戦えば結果が出るのかをまず考えなければいけない。続いて、一貫指導体制の確立とありますが、少なくともエリートになる選手たちには長期的にコーチングをしていかなければいけない。何よりもレベルの高い試合をしていかなければいけないということで考えています。

次のページにさせていただくと日本スタイルの確立と長期選手育成計画ということが書かれています。ラグビーの世界では、こういう関係者が一同に集まって今後の強化について語るということが行われたことは1度もありません。昨年11月にこのような会議をはじめて開

きまして色々な意見をもらいました。今それらをまとめて、最終的にどのようなものが日本の戦っているスタイルなのか、勝てるスタイルなのかということについて検討しています。そして、戦術以外にも、ラグビーの世界では3年その国に住むと日本のパスポートを持っていないくても日本代表に入れるというルールもあります。今の日本代表では半分近く外国人選手が出ています。そのような状況でいいのかどうかということも議論されました。ここは簡単には結論は出ませんでした。日本の2019年への強化の方向性としては少しでも日本人の選手がグラウンドに立っているように強化していかなければいけないという話がありました。

今までラグビー協会が、こういう年代ではこういうことをした方がいいということのアナウンスしたことはなかったのですが、日本が目指すべきスタイルをはっきりさせて各年代に降ろしていくことを今考えています。それぞれの年齢に応じてどのような発想で行うべきなのかということです。まだ、実はこれは作成途中で4月を目途にできるだけ早い段階で出していきたいと思っています。ここで出てきたスキルやスタイルを全国にどのように降ろしていくかが一番の問題になります。

ここで、強化スタッフとスタイルを全国に浸透させるということで、次のスライドを見ていただくと、日本のラグビー協会としては初の試みだったと思うのですが、9～11月にコーチングディレクターという人間とリソースコーチという人間をラグビー協会のサイトで公募しました。現在、高校レベルでは、高校の先生方に指導をお願いしていますが、全ての選手、全ての指導者に集まっていただくのには無理があるということで、これからはコーチングディレクターという人間がそのスキルやスタイルをリソースコーチと相談して、全国に降ろしていきたいと思っています。このような形ですね。北海道、東北、関東と9つに分かれています。これを日本のラグビー協会として今まで以上にスピードを上げてやっていくというのがあります。そのコーチ陣は、ジャパンAや7人制、U-20の監督・コーチも務めながら日本のスタイルを確立していくというアイデアでいます。ラグビーの世界では体の大きさやフィットネスが非常に大切な要素になっていて、そういった人間を多く登用して、高校生の年代からそういうことをしていかなければいけないと思っています。

高いレベルの試合をするということはどんな競技においても必要と思いますが、日本代表ではティア1の国と対戦する。ただ、ティア1の国にとっては下位の国とやるメリットはありません。例えばイングランド対フランスをイングランドでやれば7万人競技場に入ります。日本とやって観客が入るか。代表の試合は1番の収入源になっていますし、競技力向上にも1番大切な要素を占めてきますので、なかなか日本と試合をしてくれません。そういう中でティア2の国で集まって今後どのようにティア1の国と試合を行っていくかという会議が月曜日に行われます。今そういう中でラグビー界も変わってきていますが、そういうことをうまく利用しながら日本代表としてはなるべく強いチームとゲームをしていきたいということがあります。

今日本ではトップリーグというのが日本で1番上のリーグになっていますが、トップリーグのレベルの向上が選手のレベル向上につながるということで、ここのリーグのレベルを上げることを大切にしていきたいと考えています。そのような発想のもとで2007年にトップリー

グのチーム数を12から14に増やしました。それから、試合数が少ないという現実がありますので、日本選手権という枠を増やして少しでも試合数を増やすなど、これは賛否両論ありますがレベルを上げるために今まで各チーム外国人は2人まで出場していたのを3人にしました。3人に上げることで日本の選手が1人出られないということも当然起きるのですが、逆に外国人選手の数が増えればレベルが高くなるということで2011年まではこのような形でやっていきます。ただし、2019年には外国人枠、チーム数ともに見直していく必要があると考えています。

そして、大学ラグビーでは、先ほど早稲田大学の話もありましたが、試合数が少なく試合ができない、部員数が多くて試合ができないといった状況があります。これはまだ決定ではありませんが、試合数を増やすために関東ではリーグ戦が行われているのですが、それが終わった後も何らかの形で試合を継続できるようにということで考えています。

◆高校生年代までの育成について

1番最初のターゲットは3年後のU-18の代表が強くなるということです。昨年度から17歳で9つのブロックから集める大会をしてU-17の代表を作りましたが、2010年度からはU-16でもブロックで良い選手を集め、U-18ではさらにそれを3地域に絞って強化を行うということを考えています。このような形で、高校生の年代でエリート選手を集めて強化をしていく。それを日本代表と少しでも近づけて行くような試みをしていきたいと考えています。

今までお話ししてきたことはラグビーをやっている選手をどのように選抜して日本代表にまで強化していくかという話なんですけど、それ以外にラグビーをやっていない選手にラグビーをやってもらえるような環境を作る試みもしています。ラグビーをやっていない選手あるいは他競技の選手からタレントを発掘して強化していきたい。トライアルを行うという案もあります。これからの選手を見つけることは簡単なのですが、どうやって育成していくかという問題もあります。都道府県によってラグビーチームにばらつきがありますので、そういった人たちにどこで日々トレーニングしてもらおうのか考えています。今日ナショナルトレーニングセンターでは、日本で1つしかないセブンズアカデミーというアカデミーをやっています。2016年から7人制ラグビーがオリンピック競技になりましたので、7人制の強化も考えています。これまでラグビーをやっていなかった人たちも視野に入れてやっていくことを考えています。このような形で中学生・高校生から選手を集めて育成していくという考え方です。

いくつか現在試みている事例としては、非常にラグビーが盛んな福岡県ではアップシオンという県独自のタレント発掘事業をやっています。県の中で運動能力に優れた人を集めて、県としてオリンピック選手になるべく育てるというプログラムで、現在は全国11の都道府県で行われています。ラグビー協会としては、福岡県のタレント発掘事業の選手からラグビーの未経験者も呼んで7人制ラグビーに親しんでもらってラグビーを続けてもらえるような環境を作ることを考えています。岩手県でも同じようにやっています。和歌山県や山形県でもこれからやり始めます。このようにラグビー以外のフィールドからもなんとか良い選手にラグビーをやってもらえないかということを考えています。

最後に競技スケジュールの統一というのがあります。日本代表が勝つために今何をやらなければいけないかということ念頭に置いて、都道府県横並びの大会やトップリーグの大会、その他の大会をもう1度スケジューリングする必要があるのではないかと考えています。

時間の関係上、早くお話しさせていただきましたが、大枠としてはラグビー協会としてこのような強化を考えています。以上になります。

中塚 ありがとうございます。時間も限られている中、今取り組んでおられる事と今後の見通しについてお話しいただきました。何か質問はございますか。

◆観客を増やすための施策

徳田仁 今選手の強化についてのお話しを伺ったのですが、一方で見る人を増やさないといけないと思います。例えば2002年のサッカーワールドカップの時はJリーグのチケットに名前を書いて応募するような試みをしていました。地域の名前が入っていた方がサポーターは感情移入しやすいと個人的には思っています。今後9年間で見る人を増やすための試みがありましたら教えてください。

岩淵 私は強化を担当しているのでその質問にはなかなか答えにくいのですが、今おっしゃっていただいた通りどのようにラグビーの魅力を伝えるかとか、今までラグビーは限られた人の中だけのスポーツというイメージが強かったと思いますので、そういうところからどのように脱却していくかが1番のポイントだと思います。例えば、トップリーグも全て企業のチームですので日本ラグビー協会として取り組んでいることの1つとして、地域にあるクラブチームと連携して7人制ラグビーの競技人口を増やしていけないか考えています。また、例えば北海道からオリンピック選手を出そうとかクラブチームの力を借りてやれないかと考えています。今いくつかの企業チームではチームの縮小を新聞で発表したりしていますので、トップリーグそのものが今の状態で維持できるか分からない状態に来ています。そういう意味では、Jリーグのように地域との連携ということは、強化の側面からも来年度からいくつか試みていきたいと考えています。

◆7人制ラグビーのオリンピック公式競技化

鈴木 去年のビッグニュースはワールドカップとオリンピックの公式競技化だったと思います。7人制はもともと15人制強化のステップとしてあったと思うのですが、オリンピック競技になる場合、そこでの結果が実際にお金に結びついてくることもあり7人制が独自の競技として1人歩きすることがあるかと思います。それはラグビーにとっていいことなのか。そのあたりのお考えをお聞かせください。

岩渕 2016年から7人制ラグビーがオリンピック競技になったということは非常に大きなニュースで、これは我々ラグビーの人間にとっては非常に明るいニュースです。実は私は昨年から7人制の日本代表のコーチもしているのですが、昨年までは7人制は15人制ラグビーの代表になるための登竜門として日本ラグビー協会の中でも位置づけられていました。もともと7人制ラグビーは15人制と同じピッチで、7分ハーフの1分間インターバルで行うのですが、15人制のシーズンが始まるまでのウォームアップゲームということで位置づけられていました。これは世界的なことです。7人制の流れが2000年ごろから大きく変わって、今世界では8カ国でサーキットと言ってF1のような形で大会が行われています。ラグビー協会として今後どうしていくかということについてですが、2016年のオリンピックだけを考えると、やはり15人制ラグビーの選手の力を借りなければいけないと思います。今からもう6年しかありませんので、スペシャリストを育てることは難しいと思います。一方で、7人制ラグビーに適した選手というのがありますので、それは同時並行で育てていきたい。セブンズアカデミーというのを年4回合宿形式で行って行く中で、中学生・高校生の年代から7人制に適した人間を育てて行きたい。監督の位置づけも15人制ラグビーの監督が1番上だったんですが、今は7人制のラグビーの監督も15人制のラグビーの監督も同格です。オリンピック競技になったことで、今後7人制ラグビーの方が日本で認知される可能性も出てきていますので、そういう形でやっています。将来的には7人制と15人制で全く別の方向性が生まれてくる可能性もあります。

フロアー ラグビーマガジンでは6月上旬に南アフリカと戦うようなことが書かれていたのですが具体的な情報をいただけないでしょうか。また、7人制について昔あったジャパン選抜の復活という話はないのでしょうか。

岩渕 南アフリカとの試合については、今のところ6月に南アフリカが日本に来る方向で話が進んでいます。正直に申し上げますと、南アフリカにとって日本に来るメリットがあまりないので、トップチームは難しくても次のレベルのチームを呼んで試合をする方向です。先ほどティア1の国と試合をすることが難しいという話をしましたが、IRBがコントロールする中では難しいので、個別に協会とコンタクトをとってやっていくしかなく、その中で出てきた話が南アフリカのトップの次のレベルのチームを呼んで試合をやるということです。7人制については、2003年まで国際大会が秩父宮ラグビー場で行われていました。世界中から日本を入れて16カ国のチームが集まって行う非常に大きな国際大会だったんですが、2003年以降行われなかった1番の問題は財政面での問題です。7人制がオリンピック競技になったということで、4月25日に国内チームだけになる可能性が高いのですが、秩父宮で大会を行いたいと考えています。現在チームの調整をしています。

中塚 6時半になりました。そろそろ岩渕さんが戻らなければ行けない時間です。最後に一言お願いします。

岩淵 今日はどうもありがとうございました。本当は最後までいさせていただきたかったのですが、実は月曜日にティア2の国で集まって今後スケジュールをどのように組むかという大きな会議がありまして、そのために日本の戦略を考えなければいけません。日本のラグビー界は去年2つの大きなニュースがあつて、これから先に進んでいく訳ですが、これまでこのように強化をしてきたと言えることが日本のラグビー協会の中にはありませんので、誤解を恐れないで言わせていただければ、思いきってやっていって何とか前に進んでいきたいと思っています。強化以外でもラグビー場に足を運んでいただき、ラグビーというスポーツの魅力を少しでも感じていただいて、ワールドカップの後にもラグビーの楽しさや魅力を皆さんと一緒に感じていけるようにしていきたいと思いますので、どうかラグビーの競技場にも足を運んでいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

第2部 ディスカッション

中塚 休憩に入る前に岩渕さんにここでどのようなテーマでディスカッションして欲しいかお聞きしたところ、ラグビーファンをどのように増やしていったらいいかということ議論してもらいたいということでした。これを1つのテーマにしたいと思います。もう1つは、直江さんや岩渕さんの話にもありましたが、実際にプレーしているプレーヤーの環境、特にトップの方は岩渕さんのプロジェクトがありますが、大多数を占める中学生・高校生のラグビー好きに対して、プレーへの取っ掛かりをどのように作るか、そしてプレー環境をどのようにしていったら良いかということについて議論できればと思います。

まず、どのようにラグビーファン、競技場に来てくれる人を増やすかということについて演者のお2人からコメントをお願いします。

□ラグビーファンを増やすために

島田 昨年20歳以下のワールドカップが日本でありましたが、私がおもったいなと思ったのはせっかくサッカーファンにもおなじみのイングランドやスコットランドの代表選手が来ている機会なのに、ラグビーファンの目が止まるどころでしか告知を見なかった気がする事です。ラグビーファンでも直前まで大会があることを知らなかった方もいらっしゃると思います。これは日本協会にももう少しマーケティングをして欲しいというのがありますし、ここにもラグビーファンの方が大勢いらっしゃっていますが私たち1人1人が友達を連れて行くしかないかと思っています。

直江 答えがあれば教えていただきたいというのが本音であるのですが、いろいろ要素はあると思います。底辺を広げて普及していくとか、岩渕さんがお話しされたシステムを変えてそれを定着させていくとかいろいろありますが、それよりも1番簡単なのは日本代表が強くなることです。そうすれば、メディアも扱いますし、そうすることで一般の方にも認知されていく。もちろん簡単ではありませんが、他のことと比べれば1番簡単なことです。ですから、岩渕さんがされている仕事は非常に大事だと感じています。

中塚 私が学生の頃は、私がいたサッカー部よりもラグビー部の方が華やかでした。国立競技場が早稲田対慶応や早稲田対明治で超満員になっているのに、大学サッカーは閑古鳥が鳴いていました。その後、サッカーの方はJリーグができて随分サッカーに関心を持ってくれる人が増えてきました。一方ラグビーでは、今でも有力校同士の試合ではいっぱい観客が入りますが、それ以外の試合ではなかなか観客が入らない。何かラグビーにも独自のメンタリティーに訴えかけるものがあると思うのですが、そのあたりいかがでしょうか。

高橋 ラグビーの良さは、"One for All, All for One"という保守的であり、皆のために尽くすということが他の競技にはないところだと思います。強化ならなんでもありということで外国人をメンバー入れたり、商業主義に走るというのはきれいなラグビーのイメージ

を消し去るものだと思うので、今ラグビーを支えている企業もやりたくないと思ってしまうのではないかと思います。ここは今タッチラグビーが学習指導要領に入りましたし、“One for All, All for One” を教育と結びつけて、公的資金をいかに使うかというところをもっていく方がいいのではないかと思います。市民的なクラブスポーツということも同時的にやっていかないと、世代交代して企業にラグビー派がいなくなった時に企業は動かなくなると思います。

個人的にはそう思っています。

小森 荘平 私はクラブチーム出身です。人気はトップリーグより大学の方があると思うんですが、大学のシーズンは10月からせいぜい1月で終わってしまいます。4月に入学してから夏合宿過ぎるまではどこも大したチームではありません。その辺に継続性がないというのが1つあると思います。逆に人気があるので、10月ではなく5月からシーズンを始めるという方法もあるのではないかと思います。極論を言えば、大学の入学を秋からにするとかね。

中塚 ここは何の責任もない場所ですので、今のようなご意見もぜひお願いします（笑）。

田中 僕は未だにラグビーのルールがよく分からなくて、映画インビクタスを見ても試合の場面はあまり感動できないのですが、実体験として大学の時に体育の授業でサッカーをやったら九州出身の人たちはやったことないということがありました。高校の時に何をやっていたのか聞いたらラグビーだとのことです。校技がラグビーで、スポーツ大会ではラグビーをやる学校もあるようです。今すぐできることというのは、高校に啓蒙して歴史を教えて、その後皆でラグビーをやるようなことは非常に手っ取り早いと思います。高校生にとってはトレーニングにもなるし、野球部がシーズンオフにラグビーをやるということもざらにあります。私が大学生の時には柔道部がラグビー部に駆り出されていたこともありました。そのようなことを考えますと、シーズン制も非常に重要です。高校生・大学生の、今はラグビーをやっていない人たちに啓蒙して、トップリーグではこういう試合をやっていますと宣伝することも1つの方法だと思います。僕がいた静岡ではもともとラグビーがあまり盛んではなかったですが、今ではヤマハがバックアップしてジュビロ磐田の年間チケットを持っていけばラグビーが割引になるような制度もやっているようで、自治体の人たちにとってもラグビーは身近になってきていると思います。スタジアムを共有しているところもありますので、例えばベガルタ仙台の試合をやった時にラグビーの告知をするということも1ついいのではないかと個人的には思っています。まずは高校生どうでしょうか。

中塚 私は高校の教員でつい先日までラグビーの授業をやっていました。

20時間のラグビー単元です。1時間は50分の授業です。だいたい2回くらい雨が降ります。雨が降る時のサブカリキュラムというのを私はどの種目においても重視してまして、見るスポーツとしてのラグビーの楽しみ方をテーマに2回ほど教室で授業を行いました。1回目は筑波大学のラグビー部員が日頃どのようなトレーニングをしているかというビデオを見せます。数年前の教育実習生が、体育理論のトレーニング単元で使うためにつくったも

ので、良くできたビデオです。ラグビーの試合の様相から、ウェイトルームでガンガン鍛えている、特に首回りを鍛えている場面、サーキットトレーニングをやっている場面などを20分間くらい見ます。ラグビーをやっている人たちはこんなに鍛えているぞということです。次に、2007年のフランス大会のオールブラックスとフランスの入場するところまで見せて、さあ今から始まるぞというところで1回目の授業を終わります。ものすごくもったいぶった後に2回目の授業で続きの試合部分を見せるのですが、生徒たちは本当に何にも知らない、言葉一つとっても、インゴールにボールを置くことをゴールという者もいればタッチダウンという者もいて、それはトライだぞというところから始まります。映像を見ながら少しずつルール解説していくと生徒はものすごく引き込まれていきます。今日もその感想文を持ってきていますが、ラグビーがこんなにおもしろいとは知らなかったという感想が多いです。体育の授業でラグビーを取り上げるのが、実は1番手っ取り早いのではないかという気がしています。ここまでのところで何かございますか。

島田 私もラグビーはルールが難しいと思いこんでいたのでちょっと敬遠していた部分もありました。得点が入るシステムも知っていればすごくおもしろいんですが、知らない身としては例えば日本代表がウェールズと試合をやって100対0で負けるとかいう結果だけを見るとサッカーではそんな点数差になることはないので日本がボロ負けしたように感じてしまいます。でも中学や高校の授業で取り上げてもらってラグビーでは1回のトライでキックも入れて7点入ることを知れば、100回ゴールを決められている訳でもないということが分かります。

中塚 島田さんは誰かに教えてもらったのですか。

島田 私がイギリスに住んでいた時にはイギリス人の友達がみんなラグビー好きなので説明してくれるのですが、説明の仕方が難しかったようですね。イギリス人なので、興味ない人でも一般教養として最低限のレベルでは知っているのですが、それを前提に話をされたのでまったく分からない私にはスタート地点のレベルが高かったです。しかし、しばらくしてこれはルールのことは考えずに純粹に見に行こうと思いました。そうしたら選手のぶつかり合う音とかが良いんですね。それに、興味を持つと自然とルールを覚えようとするんですね。私は女の友達をよく秩父宮に連れて行きますが、ルールのことは気にせずに見てと言うと競技にはまってくれたり、イングランド好きの方にはイングランドのスタジアムに行く機会はなかなかないだろうけど秩父宮はトラックがなくて昔のイングランドに近い雰囲気を持っていると思うのでその辺を勧めています。

中塚 直江さんはどうですか。

直江 僕は自分でもやっていた人間なので、なんでこのおもしろさが分からないのかなと思ってしまうくらいですね。よくルールが分かりにくいと言われますが、実は野球よりも簡単ですよ。なんで難しいかという野球のように小さい頃から見慣れていないからだ

思います。ルールブックの厚さで言ったらラグビーの方が野球より断然薄いですよ。それくらいシンプルに考えて良いスポーツでもあるし、メディアを通して多くの人に認知してもらえようとしていく必要があると思います。

嶋崎雅規 高校の現場でラグビーを指導しています。1番の阻害要因はお母さんです。

1年生をラグビー部に誘って、一緒にボール扱って楽しいねって言って家に帰り、親に相談しますよね。そうすると、危ないからやめなさいとか、お母さんから反対されちゃうんです。今の男の子は情けなくて、お母さんが反対すると辞めちゃう。最近そういう子が多いです。ですから、女性への普及というのが非常に重要だと思っています。ラグビー場も、圧倒的に男性、しかもおじさんたちが多いです。若い人とか、女性が相対的に見ると少ないです。私は体育の教員ではないので、授業でラグビーを扱うことはできないのですが、ある都立高校の先生のお話しでは女の子の授業でラグビーをやるときにタグラグビーだと危なくないですし、喜んでやるそうです。雨が降った時には中塚先生のようにビデオなどを使ってラグビーの魅力を伝え、かつ最後の言葉が決まっています。「男の子産んだらラグビーさせや」というのが決め文句だそうです。そういう意味で私は女性への普及が非常に大事だと思います。オリンピックの7人制は男子だけではなくて女子もありますので、日本協会も女子のトライアウトをやっています。いろいろなスポーツをやっている方、スポーツ経験にない方も巻き込もうとしていますので、女性がラグビーに親しめるようになればというのが私の1つの考えです。

もう1つ、テレビの話題なのですが、高校ラグビーはかつてTBSの全国ネットで放送されていました。東京都の決勝戦も11月第3週の日曜日に生放送でやっていました。しかし、今は東京では花園の大会の決勝が放送される以外は、まずほとんど放送されません。関西ではMBSがダイジェストも含めて放送しているようですが、東京では高校ラグビーを見ようとするとスカパーに入るしかありません。私も以前高体連の役員でテレビ局の方と交渉していましたが、打ち切られる時に言われたのが視聴率です。11月第3週午後1時から高校ラグビーの決勝を放送して、最後の視聴率は1.7%でした。テレビ局の人に言われたのは、「この時間にマラソンか駅伝をやったら2ケタは確実に取れますからもう勘弁してくださいよ」という言葉です。なかなか地上波での放送がないのは、見てくれる方がいないと民放の場合は難しいようです。

牛木 テレビの視聴率の話が出たので、その業界で仕事をしている人間として申し上げたいのですが、テレビは多チャンネルに変わってきています。今の地上波は7つのステーションがどうなるかまだ良く分からないので、テレビに頼ることは非常に難しいと思います。実は今350チャンネルくらいある訳ですから、有料のチャンネルということもありますがラグビーも見たいと思えばテレビで見られるんですよ。ただ、たくさんあるチャンネルの中からラグビーを選んで見るかどうか。放送はされていても見る人がいないということもあり得るわけです。アメリカでは7~8%が良い視聴率です。多チャンネルになれば見るものが分かれる訳ですから、日本のように20%出なくてはということはないですね。ラグビーが多チャンネルになった時に5~6%くらい取れるかどうか。そして、それがスタジアムに来る客

につながるかどうか。僕はそうは思わない。テレビを頼りすぎるのはあまり良くないと思っています。

山本修 テレビに頼りすぎてはいけないというのは分かるのですが、現状として私もラグビーが見たいからスカパーに入っていますし、昔からNHKでは早慶戦や早明戦もずっと放送してくれています。早慶戦や早明戦をやっていることは知っていても、ラグビーのワールドカップがあることすら知らない日本人もいると思います。確かに日本代表が強くなればメディアで取り上げてもらえるようになるんでしょうけど、にわとりが先か、卵が先かという部分もありますよね。私もはじめはテレビを見てはまり、次は競技場に行ってみようと思いましたが、まずは、テレビを見ておもしろいと思うきっかけを掴んでもらえるように、録画でもいいので取り上げてもらえればと思います。実は日本選手権の決勝を秩父宮に見に行きましたが、その時に仲間内でできることをやろうということで、たった4人でNHKにアジア最終予選の日本代表戦を放送してくださいという署名を200名分ほど集めました。基本的に皆さんに賛同していただけて、選手の方にも何人かサインしていただきました。昔は5ネーションズやワールドカップもNHKで放送して、世界のラグビーのすごさを感じられましたので、まずは日本代表戦から少しでも放送してもらえればと思っています。

あと、指導要領に本格的にタグラグビーが取り上げられたところなので、これをもっと有効に活用していければと思います。女子代表キャプテンの鈴木彩香選手は、小学校のタグラグビーの出身でそこから本格的にラグビーをはじめた方です。小学生のタグラグビーの大会では年々参加チーム数は上がっているんですが、中学校でやる機会がなかなかないんですよ。大阪あたりでは中学校のチームもいくつかありますが。タグラグビーの場合、鬼ごっこのように女の子も楽しめるので、タグラグビーを普及させることが、ラグビーを見る人を増やすことにも、やる人を増やすことにもつながるのかなと思います。

□グラウンドの芝生化について

岸桂吾 サッカーとも連動するのですが、校庭の芝生化がラグビーの普及には有効だと思います。島田さんはイングランドで芝生のグラウンドを見られてきたかと思うのですが、子どもたちは誰だって芝生に飛び込みたい気持ちがありますよね。芝生ではないグラウンドだとセービングはやりたくないとか、お母さんが心配するように危ないというのがあると思います。Jリーグでも芝生化計画を薦めたり、私が住んでいる市川市でも一部芝生化はやっていますが、果たしてなぜその学校が芝生化の指定校になったかは分かりません。どういう基準で芝生化の学校が選ばれているのか、その基準が分からないのですが、中塚先生が文科省等に実際に芝生化の要請をされたことはあるのでしょうか。

中塚 個人的にはありますが、まず学校内のコンセンサスを得ることが非常に難しいですね。もっと言うと、体育教師同士のコンセンサスです。芝生にするとメンテナンスの問題が出てきますよね。人工芝でもそうなのですが、1度芝生にした時にどういうラインを引くのかという問題も出てきます。そういうところから体育教師の中ですごく小さな話になって、なかなか前に進んでいかない。ここ5～10年で芝生の良さが少しずつ浸透してはいますが、ま

だまだ芝生ではない方が年中使えていいという現場の指導者も多いですね。

牛木 東京都のある地域のいくつかの小学校で校庭を芝生にしているところがありますが、芝生の養生をするのは期間的に決まっているんです。そうすると、同じ時期にどの小学校でも芝生が使えなくなる。そうすると学校開放でやっているサッカー教室はどこでもできなくなってしまうということが起こり、なかなか簡単ではない。

直江 これラグビーでも実例があるんですね。福岡県に筑紫高校というラグビーの名門校があります。ここは公立高校なのですが、ラグビー場一面芝生です。県から支援をいただいて芝生化を行ったのですが、皮肉なことにこの学校は全国的にも有名な猛練習をする学校です。練習したら1週間でグラウンドがだめになっちゃう。シーズンのうち10カ月は養生しているらしいですよ。試合前の1週間ずつくらいしか使えない。こうなると芝生のメリットが全部消えてしまいますね。普段は砂のグラウンドで練習しているんです。今年の冬の全国大会で優勝した東福岡高校の谷崎先生ともよくお話ししますが、今の日本の高校生のシステムでやれば天然芝は無理ですね。東福岡は去年の8月に全部人工芝にしたのですが、今のままだと人工芝にするしかないですね。人工芝も夏は温度が上がりすぎて練習ができなくなってしまうというデメリットもあるので難しいですが、人工芝の技術を高めていくしかないと思います。逆にイングランドやニュージーランドではなぜ芝生でできるかと言ったら、練習量がまず少ないです。週2回しかやらなかったらグラウンドも大丈夫です。ニュージーランドではクラブチームのグラウンドは市の持ち物で、クラブハウスだけ自分たちで立てるというやり方でやりますが、芝と言ってもたいした芝じゃないです。草みたいなものです。シーズンスポーツなので週2回限定でやればなんとかなるんです。

なぜ今大学が一斉に人工芝にしているかと言うと、芝でやるとタックルとか全部変わるんですよ。下のボールに飛び込めと言っても、砂のグラウンドでやるのと芝のグラウンドでやるのとでは勢いが全く違います。これを小さい頃から積み上げてきて差はどんどん大きくなります。そう考えると、おっしゃる通りでグラウンド問題をどうにかしなければいけない。2019年に日本のグラウンドがどうなっているかというのは非常に大事にバロメーターになると思います。

岸 Jリーグ百年構想の番組でも、必ず芝生のグラウンドに子どもたちがいてという場面で始まるので、イギリス生まれのスポーツはやっぱり芝生が大事じゃないかなと思っ質問しました。

島田 私は芝の専門家ではないですが、確かにおっしゃる通りイングランドで土のグラウンドはまず見たことがないです。芝生と言っても草みたいなもので公園も全て芝生です。あれは自生しているのですか？

直江 ニュージーランドだとホースで種みたいのを蒔きます。それが2週間くらいしたら小さい芽が出てきて1カ月くらいで生え揃います。だから日本の芝みたくに立派なものではないです。

島田 2002年のワールドカップの時にイギリスのテレビ局のお手伝いをさせていただいて、福島のアディダスに一緒に取材に行きました。アディダスの方はイギリス人のクルーにここは何面もあってと説明していましたが、イギリス人は全然驚いていませんでした。当然ですよ。イングランドだとナショナルのアディダスのような所ではなくても、そこら辺の公園にも何面もピッチがあるので。それで、結局その説明の場面はカットされて、番組には渋谷にあるアディダスのフットサルコートを使っていました。日本はこんなビルの屋上でしかサッカーボールを蹴る場所がないという使われ方をしていました。そういうところをイギリス人が使いたくなるのも分かると思いますし、実際クリケットやウィンブルドンのテニスなどもみんな芝で行われています。日本とイギリスは気候も違うので品種を改良したりしなくちゃいけないのかもしれませんが、ただ私はイギリスの校庭で芝生が傷んでいるのを見たことがないですよ。後は、私が好きなマンチェスターユナイテッドやマンチェスターシティというチームだと芝の練習場を何面も持っているのでも、毎日練習しても休ませることができます。ラグビーだとタックルとかでもっと傷むのかもしれないですけど。せっかく日本人は優秀な技術を持っているので芝を改良してもらおうとか。あと、イギリスだとグラウンドキーパーという芝の管理をする人が監督以上の権限を持っています。試合が行われるグラウンドは、試合が行われる日以外はそのグラウンドキーパーの許可がないとファーガソン監督も芝の上に立つことができません。

□ユース年代以下のラグビー環境

中塚 芝生の問題から、どうやってプレーする環境を確保していくかという話に展開しつつありますが、終了の時間が近づいてきています。けれども、せっかくなのでユース年代以下のラグビー環境について、先ほどから練習時間の問題や補欠ばかりの問題などいろいろ出ていますが、これについてアイデアや提案をお持ちの方がいらっしやいましたらお願いします。

牛木 提案ではなく直江さんに質問なのですが、直江さんのお話しで重要なのはラグビー界の構造改革だということをおっしゃっていましたが、僕は同じようなことをサッカー界で40年以上前から言っていてようやく30年くらい経って実現しました。ラグビーでは2019年までにそのような構造改革が間に合う見込みはあるのでしょうか。

直江 日本のラグビーは80年くらい同じシステムで来ています。これを変えようと思ったらいろいろな人が絡んでくるし、いろいろな利権も絡んでくるので相当難しいと思います。僕が去年岩淵さんにインタビューした時に話したことは、おそらく普通に変えようとしたら変わらないだろうということです。ただ、去年ワールドカップ招致が決まりました。オリンピックの種目にもなりました。このタイミングで変えられなかったら2019年までに変えられないですね。残り9～10年の問題ではなく、今年変えないと変わらないと思います。岩淵さんがそのことを今考えられていて、今度の4月に革命的と言っているようなことが発表されると思います。

フロアー 私は子どもの頃クラブチームでラグビーをやっていて、週1回日曜日に試合があっ

て必ず行けば試合ができたんですね。練習は自主トレをやっているだけなんですね。いろいろな他のチームに混ざったりもしていましたけど。私の感覚からして、週1回試合をやって、週2回練習すればかなりのチームができると思うんですね。少なくとも今の大学のレベルであれば、あれより強いチームが作れると思います。公共の場所で集まれる場所があれば、そこをベースにいくつかのクラブチームと協力できればいいと思うんですね。今の大学では、練習のしすぎという問題や補欠という問題で、たまたま会社に慶応のキャプテンだった者がいるんですが、早慶戦をやってもほとんどの人は見ているだけですよね。一方海外を見ると、朝から7軍くらいまで作ってずっとやっていますね。そういうところを、もう少し考え方を変えてやっていかないとだめなんじゃないかと思います。

直江 本当にその通りだと思います。日本のスポーツはやはり学校スポーツが中心ですよ。そういうところがもう少し変わっていかないと、この先発展していくのは難しいかと思えます。それを変えましょうと言って、岩淵さんともよく話していますし、きっと変えてくれるはずだと信じています。

白井 先ほどから週2回の練習、週1回の試合でいいんじゃないかという話が出ていますが、サッカーや野球でもほとんど休みがないんじゃないかという状況は同じですね。野球はとりあえず週1回休みの日を作るということを決めたんですが、守られるかどうか分かりません。そんなに練習をしないとだめなのか。それが強化につながるのか。先ほど嶋崎先生がおっしゃった怪我の問題も1つあるんですが、もう1つは高校生で運動部の強いところに入るとほとんど勉強しないという状況があると思います。だから親からすると入れたくないという状況があるんじゃないかと思います。そこら辺のご意見を聞きたいです。

嶋崎 高校生年代のラグビーの環境というお話しで、今大学生では人が多すぎ試合に出られないとか、毎日練習してやりすぎなんじゃないかという意見が出ていましたが、ラグビーをしたくてもできないという全く逆の現象も起きています。それはどういうことかと言いますと、東京都の高校の加盟チーム数は1990年頃の1番多い時にはだいたい140校ありました。今の加盟校は90校です。そのうち部員が15人以上いるチームは60校くらいです。残りの30校くらいはいわゆる合同チームというもので試合に出ます。現実に少子化で学校規模が小さくなっています。例えば5学級になると1学年の生徒200人。共学であれば男子100人です。100人中で10%の10人がラグビー部に入ってくる確率はもうほぼあり得ません。そうすると1つの学校でいろいろな部活動を揃えるという学校スポーツのやり方は今後不可能であろうと私は考えています。特にラグビーのように1チームの人数が多いものはだめだと思います。ですから、学校の枠を越えた地域のチーム、これはクラブチームという発想になるかもしれませんが、我々はそうではなくて高体連というところできっと受け皿を用意して地域に拠点校を作ってそういうところでラグビーができるように持っていこうと考えています。学校対抗でチャンピオンシップのトーナメントをやっているから1回戦負けで年間3試合しかできないというチームが出てしまうので、学校対抗の発想は捨ててもらって人数が多ければ何チームも出て良いという地域のリーグ戦をやるという発

想でいかないといけないと思います。試合数の確保というのが1番大きな問題でトップチームのレギュラー選手はいいんですが、補欠の選手や弱小チームにいたのでは公式戦がないとか、部員が15人集まらないという環境になってしまっていますので、学校対抗という枠を取っ払ってラグビー協会主導でサッカーのような地域のリーグ戦をはじめていくことがいいんじゃないかと考えています。

中塚 いろいろな意見が出てきたところですが、もう予定の時間をオーバーしています。ラストのコメントをお2人からいただきたいと思います。どうやってファンを増やすかという部分とどうやってプレーしている人たちの場をより良くしていくかということ、あるいは2019年への思いも含めて一言ずつお願いします。

島田 まず練習が週2回というのはイングランドプレミアリーグの下部組織でも同じで、練習は週2〜3回で毎日やることはありません。練習時間も日本のように朝から晩までやる訳ではなくて、数時間ですね。通っている学校でサッカーをしている子でも、優秀になるとスカウト網がイギリス中に張り巡らされているので、そこに引っ掛かって各クラブチームのアカデミーに所属するわけなんですけど、そうするとアカデミーに所属した子は学校でのサッカーの試合などには一切出られなくなるんですね。だから学校でもうサッカーをやることはなく、アカデミーに専念するのですが、週2回で大丈夫なのは毎週試合があるからだと思います。下部組織の場合は、全国リーグではなく例えばイングランドを4〜5つの地域に分けてその中で練習試合も盛んにやっていますし、あとはリーグ戦を行っています。それがあって週2〜3回の練習でも大丈夫なのかと思うので、まず日本では試合数を増やすこと。それは学校対抗ではなくて、同じエリアにある学校で1つのチームを作ってだとか、そういった方法でも良いと思うんですね。その辺はがんばっていただければと思います。

あと女性のファンを増やすということなのですが、秩父宮で日本ではじめてラグビーを見た後に、1人で花園に行きました。そうしたら花園という場所柄関西の方が多く、おじ様方の野次が結構あって、私は関西弁にあまり慣れていないのもものすごく怖かったのを覚えています。なので、野次を飛ばす時ももう少し女性が怖がらないような野次の飛ばし方をしてくださるといいかと思います(笑)。

直江 おもしろい取材をしたことがあるのですが、練習時間については国によっていろいろあるんですね。ニュージーランドでも、ほとんど学校は週2回練習で土曜日に試合です。これがアカデミーに入ると月曜日にウェイトトレーニングが入り、実質3日になります。イギリスでも同様だと思います。オーストラリアだとスポーツ学校があったりして、そこだと授業でやるので回数は変わってきます。おもしろいのは南アフリカで、南アフリカにはラグビーに限らず猛練習で鍛えて強くなるという文化があります。南アフリカと日本だけ週5回練習をやっています。練習回数については、そのようにバラエティーがあって良いと思いますが、1番大事なのは試合のことですね。とにかく毎週試合をやる。練習をやったらすぐ試合で試せる。それを練習にフィードバックして、もう1回試合でやってみる。その環境づくりは大人がやらないとだめですね。まずはこのような環境を真っ先に作る事が大事だと思います。

ます。先ほど嶋崎さんがおっしゃっていた合同チームなのですが、僕も以前合同チームで勝ち上がったなら全国大会に出られるのか質問したことがあります。花園でやるインターハイは単独校でしか出られないということでした。そこで、ラグビーはこれだけ人口が減って、試合をする機会がなくなっているのに、ラグビーがはじめにその枠を取っ払えばいいじゃないですかという提言をしました。それくらいやっても全く変わらない。嶋崎さんのおっしゃるように高体連の枠を越える動きが出てこないといけないと思いますし、極端に言えば僕はやっちゃえばいいと思います。東福岡の谷崎先生が1度おもしろいことをやったのです、それは何かという有志リーグを作ったんです。強くなりたいチームはやっぱり色々と考えてやる実行するのです。そうすると協会も見過ごせなくなって後から着いてきたりすることもあるのですよ。今日いただいたご意見も全部その通りだと思います。あと9年間しか時間が無いわけで、その中でこれはいい、これはだめと考えていたら絶対に合いません。良いと思ったらとにかくやってみることだと思います。間違ったらそれはそれで変えれば良いわけです。そうやって小さいところから何でもいいのでやっていかないと間に合わないと思います。ですから、今日ここにいる皆さんからいただいたご質問やご意見が、単純にラグビーに関わる仕事をしている人間として非常にうれしかったです。これだけ興味を持っていただけているのかと思い非常に幸せでした。

中塚 ありがとうございます。あえてシンポジウムの中身をまとめることはしませんが、どちらかというサッカーネタの多かったサロンのシンポジウムで、ラグビーの題材を取り上げ、話を聞いていると、サッカーでも前に同じ話をしたことがあるなどということがいくつかあります。なぜ今サッカーのユースリーグが協会主導で全国に展開しているかという、良いか悪いか分からないけど、とにかく始めてみたから始まったわけで、いまのように展開しているわけです。直江さんがおっしゃったように、どんな小さなことでもいいから始めればいいのかなど思いました。それと、2002年のサッカーワールドカップの時も、2002年は確かに目標だったのですが、大事なのはその後です。ラグビーでも2019年は大事なのですが、その後何を残していけるかということをもたまたま皆で考えていければと思います。

普通はこれで終わるのですが、実はサプライズがあります。

今回岩渕さん、直江さんも忙しい中いらしてくださいましたが、たぶん公私ともに一番忙しかったのは島田さんなんじゃないかと思います。実は、3月3日にクボタスピアーズの吉田英之選手と入籍されました。おめでとうございます。(拍手!!)

(花束贈呈)

島田 ラグビーを見始めてからJリーガーの友達に、最近はずっかりラグビーに魂を売っちゃったよねとか、埼玉スタジアムに行くと「今日ラグビーいいんですか」と言われ、秩父宮に行くと「今日サッカーいいんですか」と言われ微妙な立場にいたんですが、実は戸籍までラグビーに売ってしまいました。明日もし福岡で行われるオールスター戦に行かれる方がいましたら応援お願いします。

中塚 以上でシンポジウムをお開きにします。ありがとうございました。